

第V章 松林 流し面B遺跡

第1節 調査の概要

第1項 流し面B遺跡の概要(第27図、第15表)

これまで公共下水道布設工事に伴う発掘調査が3箇年度行われている。本遺跡は砂質平野・氾濫平野に位置し、北側を流下する千ノ川による浸食のため、東半部は突出した形状を呈する。古代を中心に弥生時代～近世までの幅広い遺構・遺物が確認されている。

平成16年度調査地点は遺跡範囲の東部と西部に分かれている。遺構の確認数は少なかったが、遺物は豊富に出土した。出土遺物の年代は古代を中心としており、特に9～10世紀代の遺物が多く確認されている(宮下2016)。

平成17年度調査地点は遺跡範囲の中心に位置しており、平成16年度調査地点に隣接する。近現代の宅地造成工事により深くまで攪乱されており、確認された遺構は近世の土坑1基のみであった(伊藤・田中2020)。

第15表 調査地点一覧表

次数	調査年月日	面積 (㎡)	主な遺構と遺物		文献
	調査組織				
流し面B 遺跡 H11下水	平成12(2000)年5月29日 ～ 6月5日	58.5	弥生時代 古代	：土器 ：竪穴状遺構1基、溝状遺構1条 土師器、須恵器、 灰釉陶器、銅製品(銭貨「神功開寶」、土製品(不明)、 礫	本書
	財団法人茅ヶ崎市文化振興財団		古代～中世 中世 近世 近代	：溝状遺構4条、ピット2穴 動物遺存体(獣骨・馬歯) ：かわらけ、土製品(伊勢系土鍋)、礫 ：陶器、磁器、土製品(不明)、礫 ：磁器、鉄製品(不明)、石製品(硯)	
流し面B 遺跡 H16下水	平成16(2004)年10月1日 ～ 10月12日	134.0	古墳時代後期 古代	：土師器 ：落込み2基、ピット1穴 土師器、須恵器、灰釉陶 器、鉄製品、礫	1
	財団法人茅ヶ崎市文化振興財団		中世 中近世	：かわらけ、陶器 ：道状遺構1条	
流し面B 遺跡 H17下水	平成17(2005)年10月25日 ～ 10月26日	50.7	古代 近世	：土師器 ：土坑1基 陶器、磁器	2
	財団法人茅ヶ崎市文化振興財団				

引用・参考文献

- 宮下秀之 2016『公共下水道布設関連調査 平成16年度発掘調査』茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告 51
公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
- 伊藤俊一・田中万智 2020『公共下水道布設関連調査 平成17年度発掘調査』茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告 68
公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団



第 27 図 調査地点位置図 (S=1/2,500)

第2項 調査の方法と経過 (第28図)

本調査は、平成11年度の公共下水道布設工事に伴うものであった。

調査区は計12区を数えた。また、総延長距離は56.6 mに達し、総調査面積は58.5㎡であった。

調査方法は布掘り調査を実施し、平板測量による記録保存と随時写真撮影を行った。

現地調査は5月29日に1区を開始し、6月5日に12区を調査して終了した。なお、調査地点の市道は生活道路として重要な役割を果たしており、交通量が多いため即日復旧を原則とした。また、交通事情により一部の調査区については順番を入れ替えて掘削した。

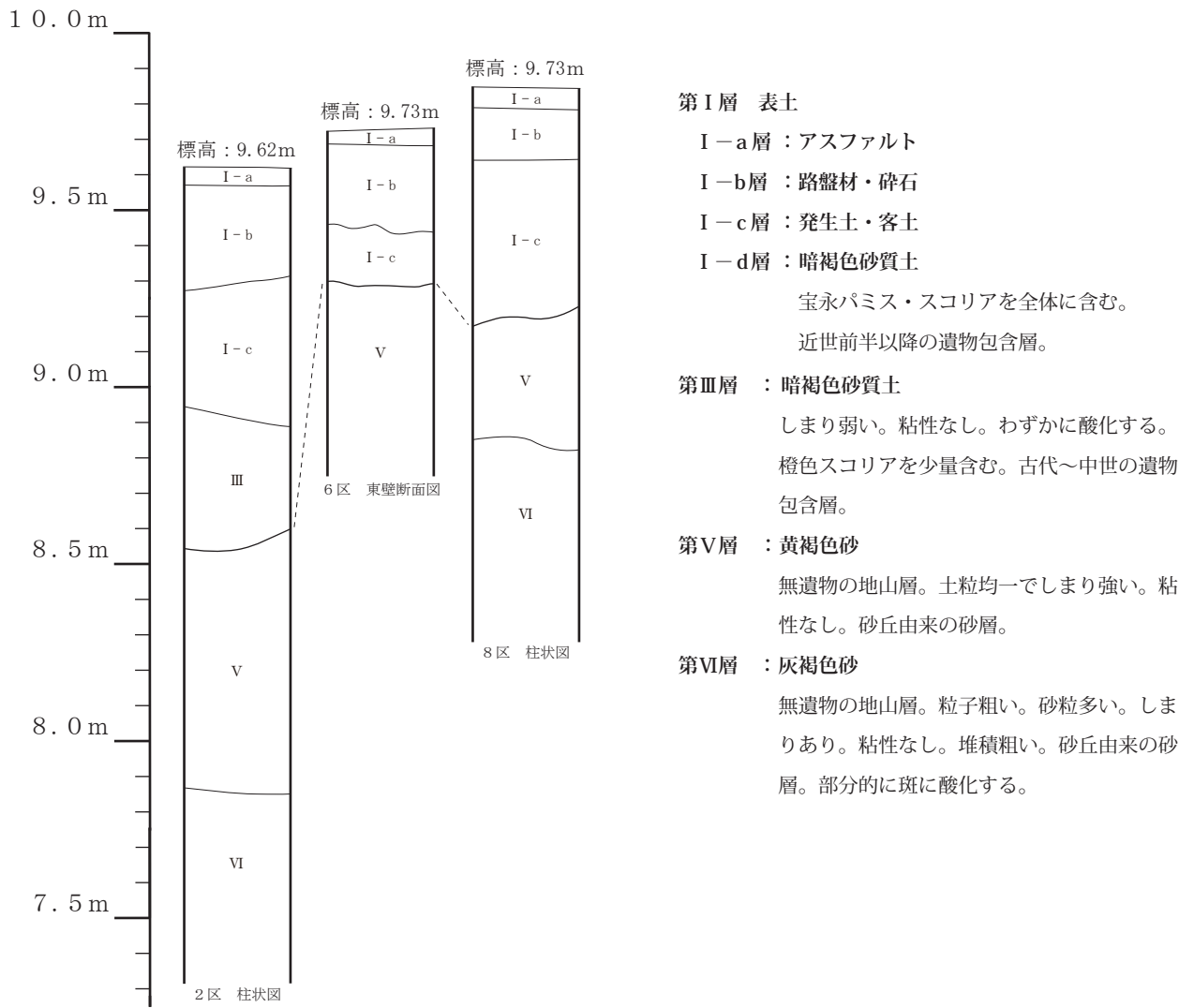


第28図 調査区位置図 (S=1/1,000)

第3項 基本土層 (第29図)

本調査地点の現況は舗装され市道3200号線として使用されていた。現標高は8区の9.73 mを頂点として東方向へ緩やかに下降傾斜している。無遺物層であるⅤ層砂の堆積は6区を頂点に東方向へ急激に下降傾斜していることから、砂丘本来の形状と現在の様子は若干の差異があると推定される。

本遺跡は砂質平野・氾濫平野に立地しており、堆積土は砂丘に由来する砂と低湿地にみられる黒色土を含む砂質土である。砂層は全体的にやや酸化し、色調は橙色を呈する。これは千ノ川の浸食を受けやすい地域であったため、土中の水分量がやや高いことに起因する。なお、湧水は確認されなかった。Ⅵ層は堆積土の粒子が粗くなり、砂粒を多く含む。



第 29 図 基本土層図 (S=1/20)

第 2 節 発見された遺構

1 区 (第 30 図、図版 8)

遺跡の東端部に位置する。調査区の延長距離は 3.7 m で、東から西方向に掘削した。近現代層直下で無遺物層の V 層が確認されたが、近現代層からは土師器、須恵器、かわらけなどの遺物が出土した。このことから、本来は古代～中世に属する遺構が存在したが、近現代の開発によって消失したものと推測される。

2 区 (第 30 図、図版 8)

1 区の西側約 1 m の地点に位置する。調査区の延長距離は 3.2 m で、東から西方向に掘削した。近現代層の直下には古代～中世の遺物包含層である III 層の残存が確認された。III 層直下には無遺物の地山層である V 層、VI 層の堆積が確認された。出土遺物は土師器小片 1 片のみであった。また、VI 層では部分的に水平に酸化した部位 (a 層) が確認されたが、これは帯水に伴う色調変化であると推測される。

V 流し面B遺跡

3区 (第31図、図版9)

2区の西側に隣接する。調査区の延長距離は5.2mで、東から西方向に掘削した。調査区の東側で南北方向に横断する1号溝状遺構を確認した。

1号溝状遺構の確認された規模は距離2.46m、幅1.37m、深さ0.30mを測る。遺構の南北両端は調査区外へ延長し、断面形状はゆるい台形を呈する。V層砂を掘り込み構築されているが、覆土上位を近現代の開発によって削平されていることから、本来の掘り込み面は不明である。覆土中に宝永パミス・スコリアを含まず、土師器を包含することから、古代～中世の遺構であると推測される。

4区 (第31図、図版9)

3区の西側約1mの地点に位置する。調査区の延長距離は4.4mで、東から西方向に掘削した。調査区南側で縦走する1号溝状遺構を、中央部で1号ピットを確認した。

1号溝状遺構の確認された規模は距離4.4m、幅0.84m、深さ0.35mを測る。調査区と同軸方向に延長し、遺構の東西端は調査区外である。3区で延長が確認されていないことから、延長軸が調査区に対してややずれるものと推測される。遺物の出土はないが、覆土に宝永パミス・スコリアを含まず、橙色スコリアを少量含むことから古代～中世の遺構であると推測される。

1号ピットの残存規模は長径0.23m、短径0.15m、深さ0.16mを測り、断面形状は碗形を呈する。1号溝状遺構に類似した覆土であり、溝状遺構に付帯する可能性が指摘できる。古代～中世の遺構であると推測される。

5区 (第32図、図版10)

4区の西側約1mの地点に位置する。調査区の延長距離は5.3mで、東から西方向に掘削した。調査区南側で縦走する1号溝状遺構を、西側で1号ピットを確認した。

1号溝状遺構の確認された規模は距離5.3m、幅0.84m、深さ0.28mを測る。調査区と同軸方向に延長し、遺構の東西端は調査区外である。4区から延長する溝状遺構であり、同様に底部でピットが確認されている。古代～中世の遺構であると推測される。なお、近世陶器が1片出土しているが、これは覆土最上位からの出土であり、上層からの混入であると考えられる。

1号ピットの残存規模は長径0.14m、短径0.12m、深さ0.21mを測り、断面形状は碗形を呈する。溝状遺構に付帯すると考えられる。古代～中世の遺構であると推測される。

6区 (第32図、図版10)

5区の西側約1mの地点に位置する。調査区の延長距離は5.5mで、東から西方向に掘削した。4・5区と同様に溝状遺構が確認されたが、近現代の掘り込みが深く残存状況が悪いことから、壁面観察での確認に留まった。

1号溝状遺構は西壁で確認されており、幅0.84m、深さ0.33mを測る。断面形状は舟底形を呈し、覆土は宝永パミス・スコリアを含まず、橙色スコリアを少量含む。古代～中世の遺構であると推測される。

7区 (第33図、図版11)

6区の西側約8mの地点に位置する。調査区の延長距離は5.3mで、東から西方向に掘削した。近現代層の直下は無遺物層であるV層の堆積が確認され、少量の土師器片は出土したが、遺構の確認はなかった。4区から続く溝状遺構の延長についても確認されなかった。

8区 (第33図、図版11)

7区の西側約1mの地点に位置する。調査区の延長距離は5.1mで、東から西方向に掘削した。7区と同様の状況を呈しており、近現代層の直下はV層であった。調査区全域で少量の土師器片が出土したが、遺構は確認されなかった。

9区 (第33図、図版12)

8区の西側約1mの地点に位置する。調査区の延長距離は5.5mで、東から南方向に掘削した。調査区の西半部は近現代の掘り込みにより攪乱されていたが、東側で1号竪穴状遺構を確認した。

1号竪穴状遺構の残存規模は長軸2.80m、短軸1.04m、深さ0.74mを測る。遺構の南北端は調査区外に延長し、西側は近現代の掘り込みにより消失する。残存状況が悪いため、遺構の軸方向は不明である。計2.5kgにもなる土師器片や皇朝十二銭である「神功開寶(765年初鑄)」、馬歯等の多様な遺物がまとまって出土している。1号竪穴状遺構以外からは計2kgの土師器片が出土しており、本来は近現代の掘り込み部分にも遺構が存在していたものと考えられる。遺物量が極めて多いことから、竪穴状遺構が役目を終えた後に土器捨て場として再利用された可能性も指摘できる。遺物年代から8世紀後半～9世紀前半を中心とした古代の遺構であると推測される。

10区 (第34図、図版13)

12区の西側約11mの地点に位置する。調査区の延長距離は3.3mで、南東から北西方向に掘削した。近現代層の直下はV層であり、遺構は確認されなかった。ただし、調査区全域の掘り山からの遺物出土量は多く、土師器141片をはじめ動物遺存体、近世土製品などが確認されている。本来は遺構が存在していたが、近現代の開発に伴い消失したものと推測される。

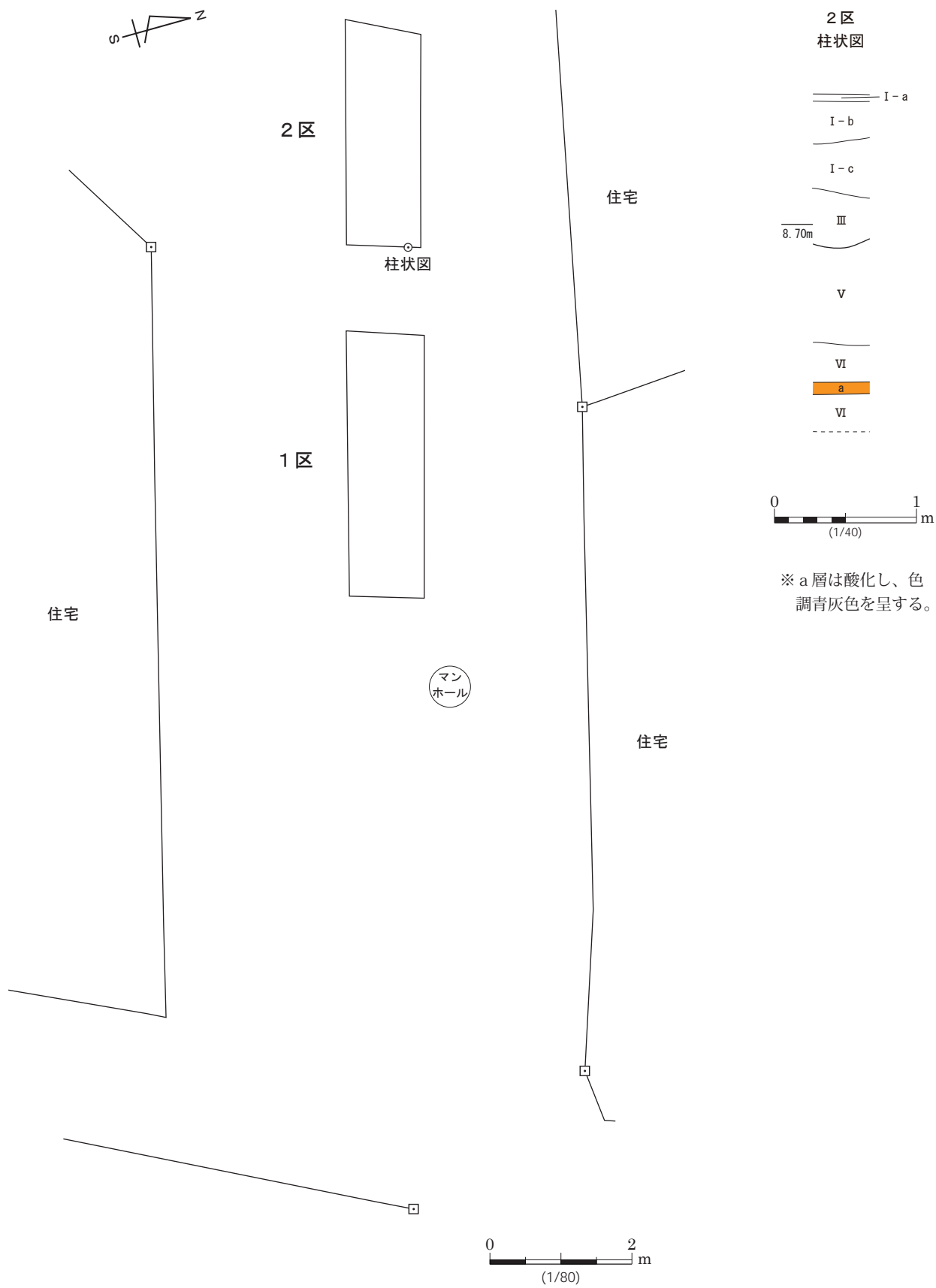
11区 (第35図、図版14)

9区の西側に隣接する。調査区の延長距離は5.3mで、東から西方向に掘削した。調査区の南半部は既設埋設管の掘り込みにより深くまで攪乱されていたが、北半部で1号溝状遺構を確認した。

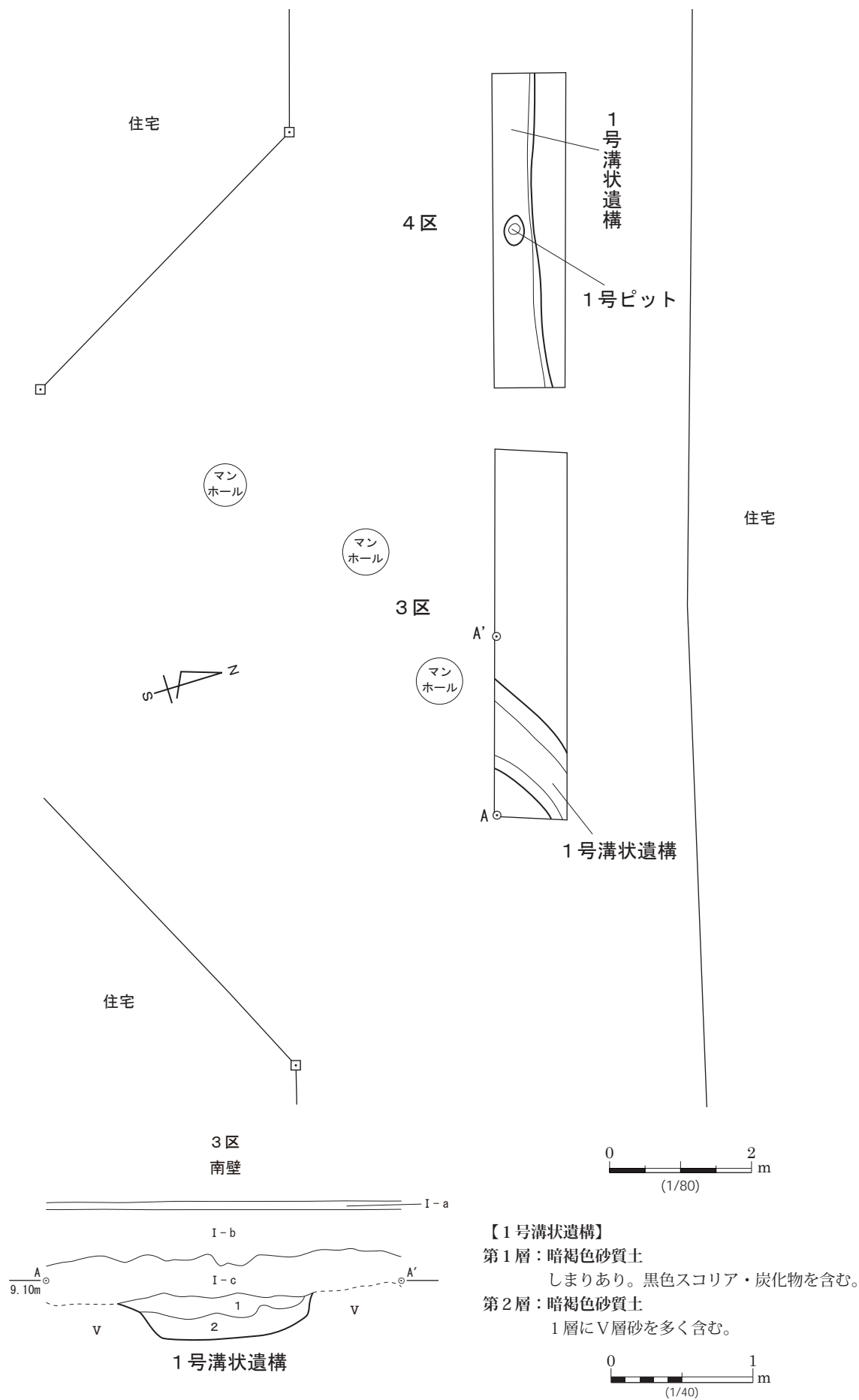
1号溝状遺構の確認された規模は距離5.3m、幅0.67m、深さ0.68mを測る。V層を掘り込み構築されており、遺構の大部分は調査区外である。既設埋設管の掘り込みにより残存状況が悪く、全体の形状が不明瞭であるが、遺構底部が平坦であることから竪穴状遺構の可能性も考えられる。ただし、ここでは確認された状況から溝状遺構として報告した。12区では延長が確認されず、土師器片を計2.7kg出土するなどの特徴を考慮すると、9区1号竪穴状遺構と同一の遺構である可能性が高いと推測される。遺物年代から8世紀後半～9世紀前半を中心とした古代の遺構であると推測される。

12区 (第36図、図版14)

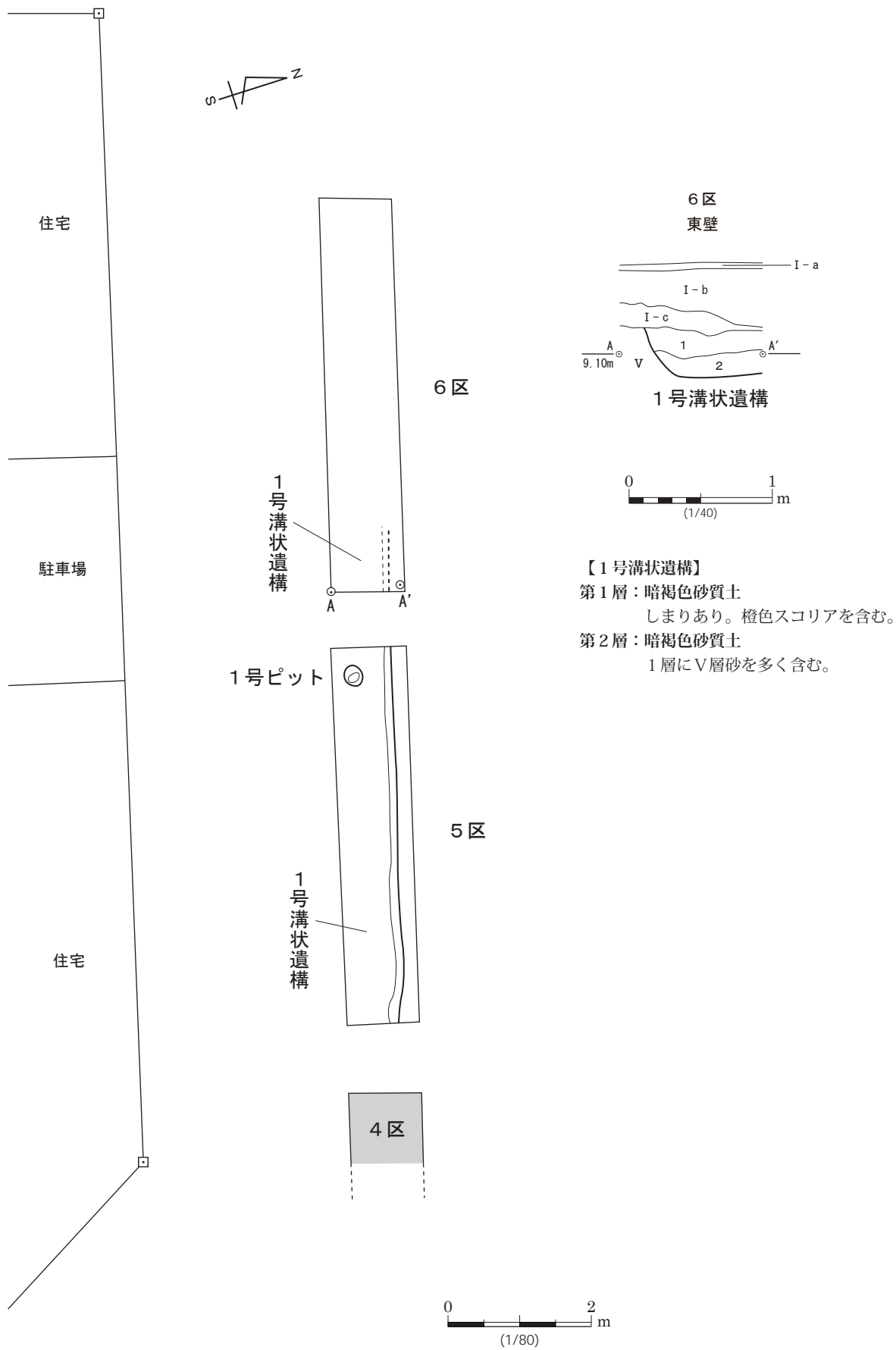
11区の西側約2mの地点に位置する。調査区の延長距離は4.8mで、東から西方向に掘削した。10区と同様に近現代層の直下はV層の堆積が確認された。近現代層からは弥生時代～近世までの遺物が出土している。遺構は確認されなかった。



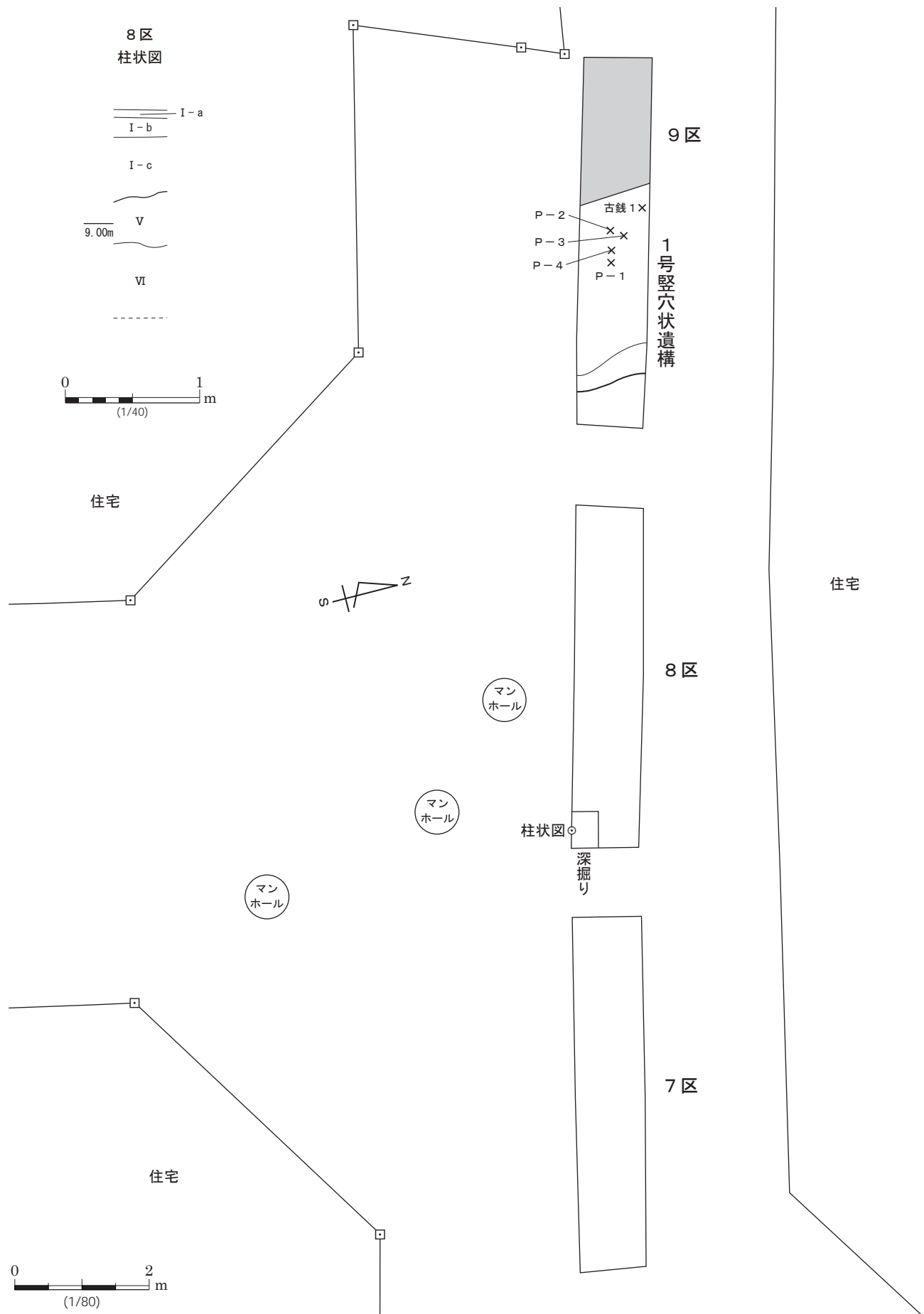
第30図 1・2区平面図・断面図 (S=1/80・1/40)



第31図 3・4区平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

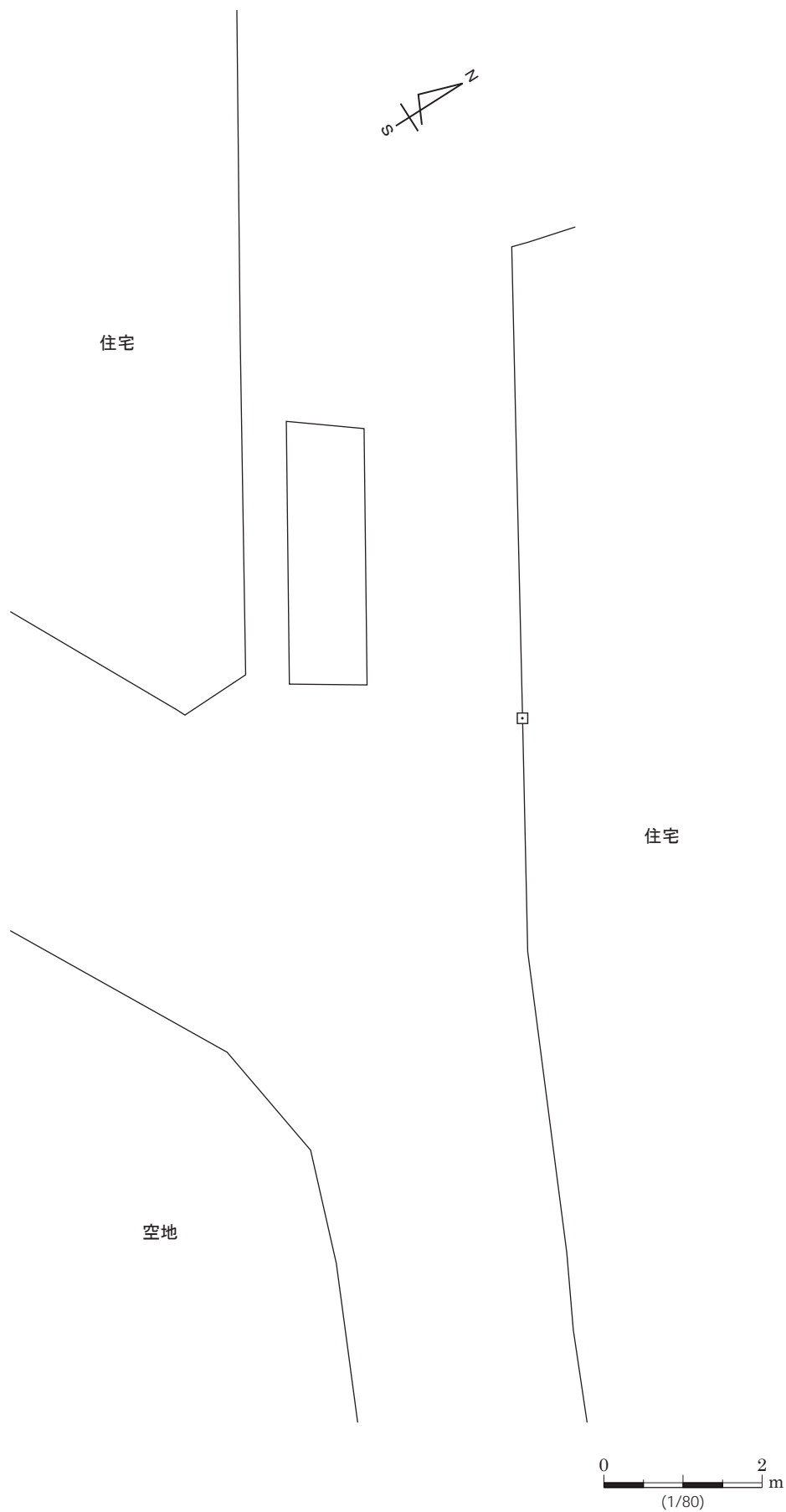


第32図 5・6区平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

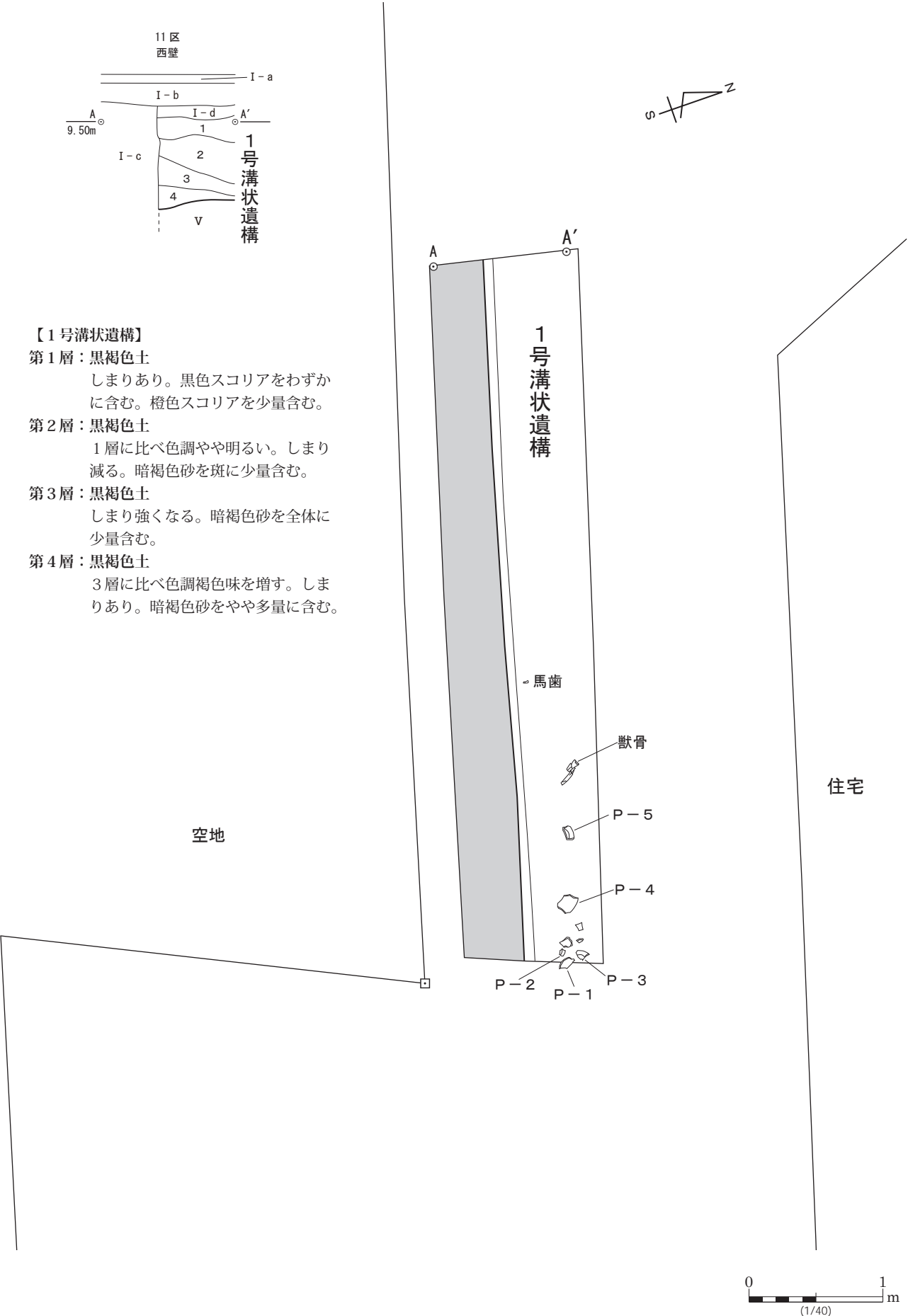


V 流し面B遺跡

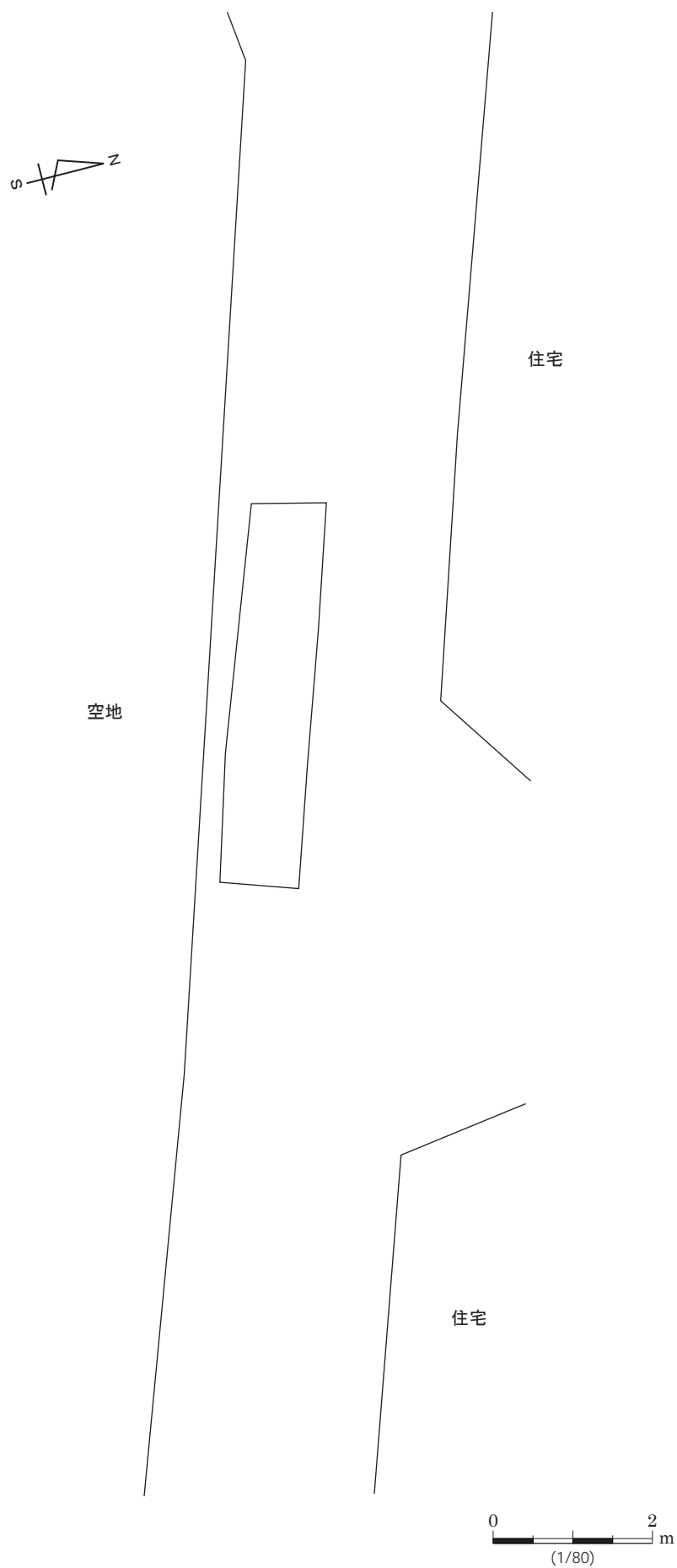
第33図 7～9区平面図・断面図 (S=1/80・1/40)



第34図 10区平面図 (S=1/80)



第35図 11区平面図・断面図 (S=1/40)



第36図 12区平面図 (S=1/80)

第3節 発見された遺物

出土遺物は収納箱にして3箱分であった。総量は弥生土器6片76.4g、土師器1,878片8,776.5g、須恵器78片787.6g、灰釉陶器3片4.8g、かわらけ1片2.1g、陶器(近世)1片1.9g、磁器(近世)2片12.8g、磁器(近代)1片4.1g、土製品(古代:不明)1片9.6g、土製品(中世:土鍋)1片7.2g、土製品(近世:不明)1片8.8g、銅製品(古代:銭貨「神功開寶」)1点1.6g、鉄製品(近代:不明)2点12.8g、石製品(近代:硯)1点29.0g、動物遺存体(古代~中世:獣骨・馬歯)、礫13点440.2gである。9・11区の遺構からの出土が主体である。このうち、28点を図示した。

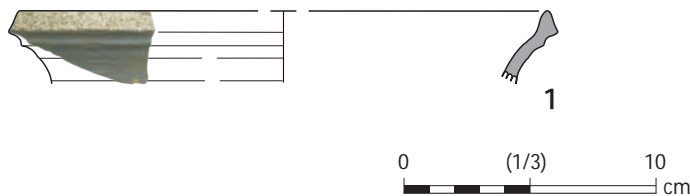
1区 (第37図、第16・21・22表)

1は調査区一括出土の須恵器広口壺であり、口縁部内面に灰降りが見られる。復元口径は約21cmであり、胎土の特徴からは東海系の須恵器である可能性が指摘できる。8世紀前半の遺構であると推測される。

9区 (第38・39図、第17・21・22表)

1~5は1号竪穴状遺構から出土した。1は土師器小型甕であり、やや薄手で内面調整にハケ目が目立っている。9世紀代の遺物であると推測される。2は須恵器有台杯の底部片であり、焼成不良により色調は赤褐色味を帯びている。東海系の須恵器窯と推測されるが、口縁部を欠いているため遺物の年代観は8~9世紀代に留めた。3は銅製品銭貨の「神功開寶」である。皇朝十二銭の3番目であり、初鑄は765年である。遺存状態は良好であり文字を肉眼で確認することができる。4はロクロ土師器の坏であり、赤色粒を多く含むが土粒の細かい胎土である。底部外面には回転糸切り痕を確認できる。10世紀代の遺物であると推測される。5は須恵器坏である。胎土に白色針状物質を含むことから南比企系の須恵器窯であると推測される。8世紀代の遺物と考えられる。

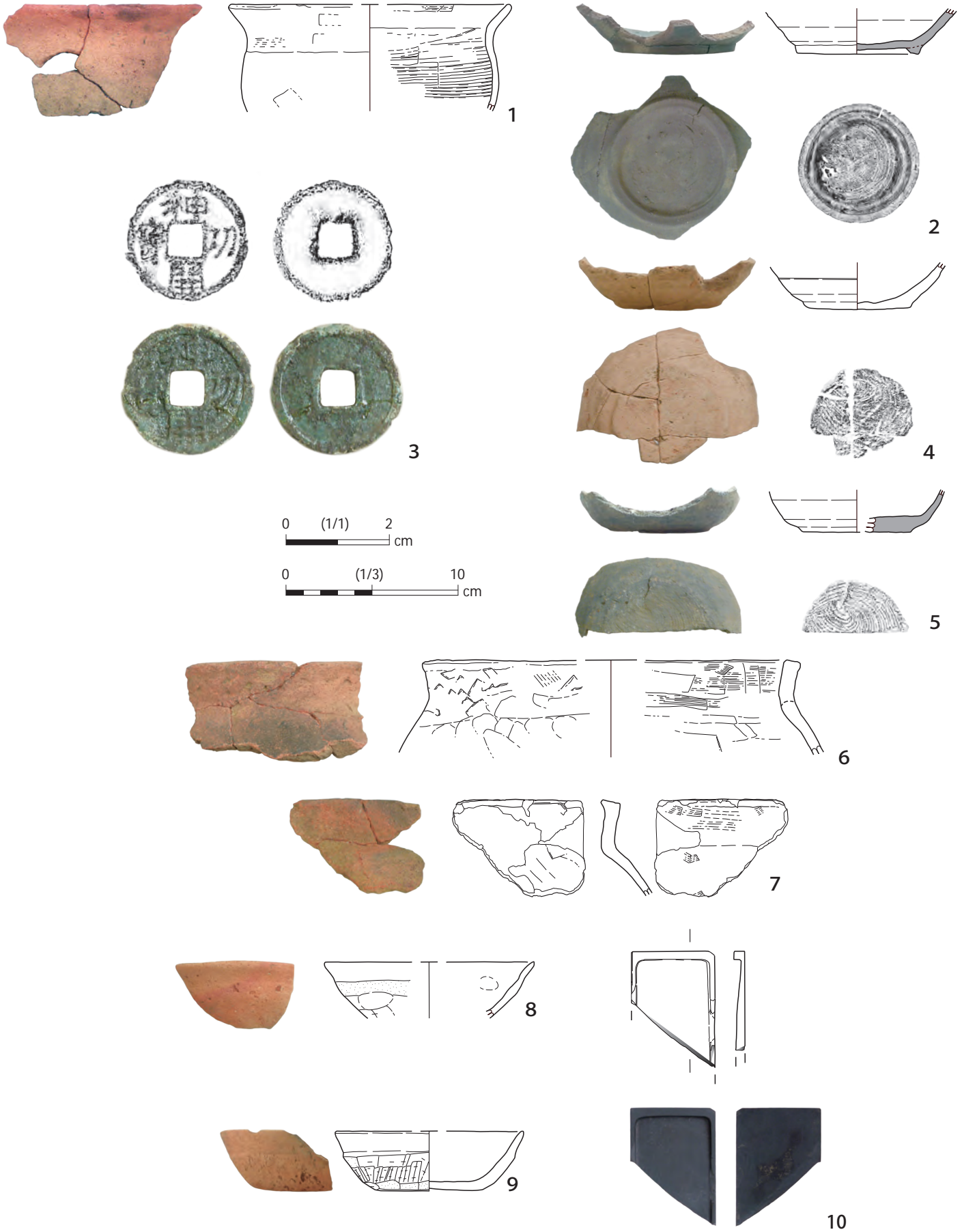
6~11は調査区一括出土である。6・7は土師器特殊甕であり、類製塩土器と考えられている三浦型甕の口縁部片である。口縁は垂直に立ち上がり短く、器壁は厚みがあり胎土と調整は粗さが目立つ。外面は著しく被熱を受けており、容易に剥落する。三浦半島以外では湘南砂丘地帯で少量の出土が確認されている



第37図 1区出土遺物 (S=1/3)

第16表 1区出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	分量・観察
1	須恵器 広口壺	調査区一括	口径: (21.0)cm 底径: (―) 残高: 2.9cm 重量: 17.8g 残存: 口縁部1/12 胎土: 密 砂粒/黒雲母を含む 焼成: 良好 色調: 灰色(5YR1/5) せいけい: ロクロ成形 年代: 8世紀前半 備考: 東海系か

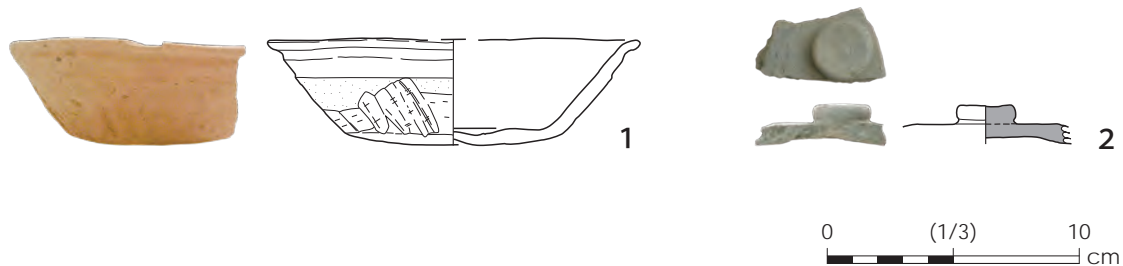


0 (1/1) 2 cm
0 (1/3) 10 cm

第38図 9区出土遺物 (S=1/1 : 5、1/3 : 1~4・6~10)



第39図 9区出土馬歯



第40図 10区出土遺物 (S=1/3)

器種であり、10世紀代を中心とした平安時代の遺物である。**8・9**は土師器杯である。**8**の体部外面はヘラケズリと一部無調整であり、10世紀前半の遺物であると推測される。**9**は外面に一部無調整部分が存在するものの、器形が箱形を呈することから8世紀後半の遺物であると推測される。**10**は石製品の硯である。粘板岩製で丁寧に整形されており、近代の遺物である。**11**は馬歯である。平たいへら状を呈していることから前歯に近い部位である。古代～中世の遺物であると推測される。

10区 (第40図、第18・21・22表)

1・2は調査区一括出土の遺物である。**1**は相模型の土師器杯である。外面はヘラケズリと一部無調整であるが、無調整部分に明確な稜が見られないことから9世紀中～後半の遺物であると推測される。**2**は須恵器蓋のツマミ部分である。胎土に白色針状物質を含み、ツマミは扁平な形状である。8世紀代の遺物であると推測され、南比企系窯の可能性が考えられる。

11区 (第41～43図、第19・21・22表)

1～11は調査区一括出土の遺物である。**1**は土師器甕であり、焼成良好のため器面が剥離せず、遺存状態は良好である。9世紀代の遺物であると推測される。**2**は土師器杯であり、全体に赤褐色味を呈している。体部外面はヘラケズリで整えられており、8世紀後半の遺物であると推測される。**3**は土師器甕の口縁部片であり、胎土に白色針状物質を含む点がやや特徴的であるが、9世紀代の相模型土師器甕と推測される。**4**

第17表 9区出土遺物観察表

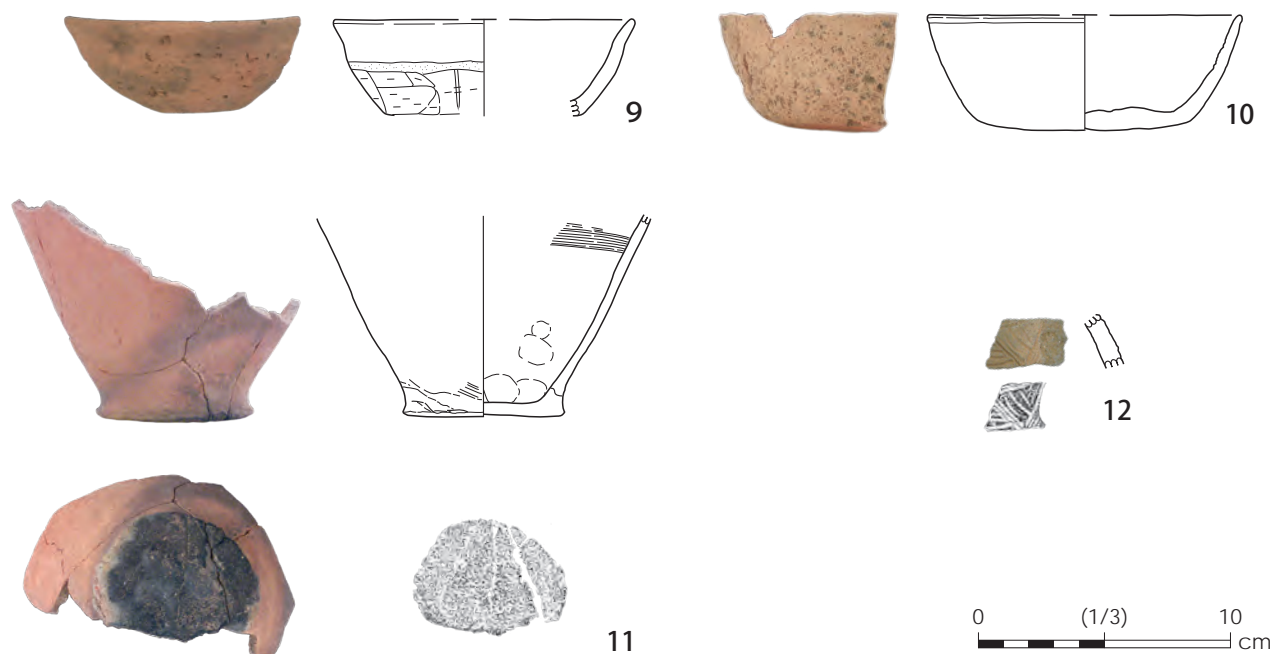
No.	器種	出土位置	法量・観察
1	土師器 小型甕	1号竪穴状遺構 P-1~3	口径:(16.2)cm 底径:(-) 残高:6.3cm 重量:40.7g 残存:口~体上部1/4 胎土:やや粗い 砂粒/粘土粒を多く含む 金雲母を少量含む 焼成:良好 色調:にぶい赤褐色(2.5Y5/4 内面) 橙色(7.5YR6/6 外面) せいけい:外面=口縁部ヨコナデ+体部ナデ 内面=口縁部ヨコナデ+体部ハケ目 年代:9世紀代
2	須恵器 有台杯	1号竪穴状遺構 P-4	口径:(-) 底径:7.1cm 残高:2.7cm 重量:64.0g 残存:底部完存~体部1/8 胎土:密 砂粒/白色粒を含む 焼成:やや不良 色調:灰色(10Y5/1/ 内面) 灰褐色(7.5YR5/2 外面) せいけい:ロクロ成形 貼り付け高台 年代:8~9世紀代 備考:東海系、焼成不良により酸化する
3	銅製品 銭貨	1号竪穴状遺構 古銭1	外径:2.3cm 重量:1.6g 残存:完形 書体:楷書 読み方:廻読 遺存状態:良好 備考:『神功開寶』(765年初鑄)
4	ロクロ 土師器 杯	1号竪穴状遺構 一括	口径:(-) 底径:6.1cm 残高:2.8cm 重量:50.3g 残存:体~底部2/3 胎土:密 砂粒/赤色粒/金雲母を含む 焼成:良好 色調:橙色(7.5YR6/6 内外面) せいけい:ロクロ成形 回転系切り 年代:10世紀代 備考:10杯3a類
5	須恵器 杯	1号竪穴状遺構 一括	口径:(-) 底径:(6.4)cm 残高:2.5cm 重量:50.4g 残存:体~底部1/2 胎土:密 砂粒/白色粒/白色針状物質を含む 焼成:良好 色調:灰色(7.5Y4/1/ 内外面) せいけい:ロクロ成形 回転系切り 年代:8世紀前半 備考:南比企系
6	土師器 特殊甕	調査区一括	口径:(22.0)cm 底径:(-) 残高:5.6cm 重量:71.1g 残存:口縁部1/8 胎土:粗 砂粒/輝石を含む 焼成:良好 色調:にぶい赤褐色(5YR5/4 外面) にぶい黄色(10YR5/4 胎土) せいけい:外面=口縁部ハケ目→圧痕→ヨコナデ 胴部ヘラナデ+一部指頭圧痕 内面=口縁部ハケ目→ヘラナデ 胴部ヘラナデ 年代:10世紀代 備考:三浦型甕(類製塩土器)
7	土師器 特殊甕	調査区一括	口径:(-) 底径:(-) 残高:5.6cm 重量:42.1g 残存:口縁部小片 胎土:粗 砂粒/輝石を含む 焼成:良好 色調:にぶい黄色(2.5YR6/4 内面) 橙色(2.5YR6/6 外面) せいけい:外面=胴部ナデ 内面=口縁部ハケ目→ヨコナデ 胴部ヨコナデ 部分的にハケ目 年代:10世紀代 備考:三浦型甕(類製塩土器)
8	土師器 杯	調査区一括	口径:(12.2)cm 底径:(-) 残高:3.3cm 重量:15.2g 残存:口~体部1/6 胎土:密 砂粒多い/赤色粒を含む 焼成:良好 色調:橙色(5YR7/8 内外面) せいけい:外面=口縁部ヨコナデ 体部無調整+ヘラケズリ 内面=口縁部ヨコナデ 体部ナデ+一部指頭圧痕 年代:10世紀前半 備考:田尾編年e段階
9	土師器 杯	調査区一括	口径:(14.8)cm 底径:(8.6)cm 器高:4.2cm 重量:86.6g 残存:口~体部1/4 底部略完形 胎土:密 砂粒多い/金雲母を少量含む 焼成:良好 色調:橙色(5YR7/8 内外面) せいけい:外面=口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ+無調整 底部ヘラケズリ+一部指頭圧痕 内面=口~体部ヨコナデ 底部ナデ 年代:8世紀後半
10	石製品 硯	調査区一括	長さ:6.8cm 幅:4.9cm 厚み:0.2~0.5cm 重量:29.0g 残存:1/2 石材:粘板岩(スレート) 年代:近代 備考:裏面に付着物(固定用の糊痕か)
11	馬歯	調査区一括	備考:前歯の一部

第18表 10区出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	法量・観察
1	土師器 杯	調査区一括	口径:(14.8)cm 底径:(8.6)cm 器高:4.2cm 重量:86.6g 残存:口~体部1/4 底部略完形 胎土:密 砂粒多い/金雲母を少量含む 焼成:良好 色調:橙色(5YR7/8 内外面) せいけい:外面=口縁部ヨコナデ 体部無調整+ヘラケズリ 底部ヘラケズリ+一部指頭圧痕 内面=口縁部ヨコナデ 体部ナデ 年代:8世紀代 備考:比企系窯か
2	須恵器 蓋	調査区一括	ツマミ径:2.4cm 残高:1.6cm 重量:15.7g 残存:ツマミ完存 体部小片 胎土:密 砂粒/白色粒/白色針状物質を含む 焼成:良好 色調:灰白色(5Y7/1/ 内外面) せいけい:ロクロ成形 年代:8世紀代 備考:南比企系



第41図 11区出土遺物1 (S=1/3)



第42図 11区出土遺物2 (S=1/3)



第43図 11区出土獣骨・馬歯

は須恵器大甕の口縁部片であり、輪積み成形の痕跡が明瞭に確認できる。8世紀後半～9世紀代の遺物であると推測され、産地は南多摩窯系が考えられる。5は土師器杯であり、箱形に近い器形である。体部外面はヘラケズリと一部無調整で仕上げており、9世紀前半の遺物であると推測される。6は弥生土器の壺小片であり、外面に格子目状の文様を施している。弥生時代中期の遺物と推測されるが、小片のため詳しい時期の特定は困難であった。7～10は土師器杯である。7は口縁部がやや開く器形である。遺存状態が不良のため、器面の調整は不明瞭であった。器形から9世紀中～後半の遺物であると推測される。8は底部片であり内面に「十字」状の線刻と布目痕が確認できる。同様の土師器杯は市内でも複数確認されているが、個体数は少

第19表 11区出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	分量・観察
1	土師器 甕	P-1	口径:(21.9)cm 底径:(-) 残高:12.1cm 重量:90.2g 残存:口～胴部小片 胎土:やや密 砂粒を多く含む/赤色粒・金雲母を少量含む 焼成:良好 色調:橙色(5YR6/6 内面) にぶい黄橙色(10YR6/4 外面) せいけい:外面=口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ 内面=口縁部ヨコナデ 胴部ナデ 年代:9世紀代
2	土師器 坏	P-2	口径:(10.8)cm 底径:7.6cm 器高:3.8cm 重量:38.5g 残存:口～体部1/6 底部1/3 胎土:密 砂粒/赤色粒/金雲母を含む 焼成:良好 色調:橙色(2.5YR6/8 内面) 橙色(5YR6/6 外面) せいけい:外面=口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ 内面=ナデ 年代:8世紀後半
3	土師器 甕	P-3	口径:(22.4)cm 底径:(-) 残高:6.9cm 重量:50.4g 残存:口～胴部1/8 胎土:密 砂粒を多く含む 白色粒/白色針状物質/金雲母を少量含む 焼成:良好 色調:橙色(7.5YR7/6)～にぶい黄橙色(10YR5/3 内外面) せいけい:外面=口縁部ヨコナデ 胴部ナデ 内面=口縁部ヨコナデ 胴部ナデ 年代:9世紀代
4	須恵器 大甕	P-4	口径:(24.6)cm 底径:(-) 残高:10.4cm 重量:330.5g 残存:口縁部1/5 胎土:密 砂粒/白色粒を含む 焼成:良好 色調:灰色(N6/0～N4/0 内外面) せいけい:口縁部輪積成形→ロクロ成形 胴部たたき目痕 年代:8世紀後半～9世紀代 備考:南多摩窯系か
5	土師器 坏	P-5	口径:(11.0)cm 底径:(7.6)cm 残高:4.4cm 重量:51.0g 残存:口～底部1/2 胎土:密 砂粒/赤色粒/金雲母を少量含む 焼成:良好 色調:橙色(7.5Y7/6/ 内外面) せいけい:外面=口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ+一部無調整 底部ヘラケズリ 内面=口～体部ヨコナデ 底部ナデ 年代:9世紀前半 備考:田尾編年c段階
6	弥生土器 壺	調査区一括	口径:(-) 底径:(-) 残高:2.9cm 重量:12.1g 残存:胴上部小片 胎土:やや粗 砂粒を多く含む 焼成:良好 色調:褐灰色(10YR4/1 内面) 灰黄褐色(10YR4/2 外面) せいけい:外面=ヘラナデ→格子目文 内面=ハケ 年代:弥生時代中期か 備考:相模Ⅳ-3～4様式
7	土師器 坏	調査区一括	口径:(11.2)cm 底径:(7.0)cm 残高:3.8cm 重量:26.6g 残存:口～底部1/4 胎土:密 砂粒/赤色粒/金雲母を含む 焼成:良好 色調:橙色(7.5YR7/6 内外面) せいけい:外面=口縁部ナデ 体部ヘラケズリ+一部無調整 底部ヘラケズリ 内面=遺存状態は不良のため不鮮明 年代:9世紀中～後半 備考:田尾編年d段階
8	土師器 坏	調査区一括	口径:(-) 底径:(-) 残高:1.4cm 重量:14.5g 残存:底部1/5 胎土:密 砂粒/赤色粒を含む 焼成:良好 色調:橙色(10YR7/6 内外面) せいけい:外面=体下部ヘラケズリ 底部指頭圧痕+ヘラケズリ 内面=体下部ヨコナデ 底部ナデ+指頭圧痕 年代:9世紀代 備考:内底部に線刻と布目痕
9	土師器 坏	調査区一括	口径:(11.9)cm 底径:(7.8)cm 器高:3.9cm 重量:29.3g 残存:口～体部1/4 胎土:密 砂粒を含む 焼成:良好 色調:橙色(5YR6/6 内外面) せいけい:外面=口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ+無調整 底部ヘラケズリ 内面=ナデ 年代:9世紀後半 備考:田尾編年d段階
10	土師器 坏	調査区一括	口径:(12.4)cm 底径:(8.0)cm 器高:4.6cm 重量:63.9g 残存:口～体部1/4 底部1/2 胎土:密 砂粒多い/赤色粒を含む 焼成:良好 色調:橙色(7.5YR7/6 内外面) せいけい:遺存状態が不良のため不鮮明 年代:9世紀前半 備考:田尾編年c段階
11	土師器 甕	調査区一括	口径:(-) 底径:6.1cm 残高:8.0cm 重量:78.0g 残存:胴下～底部2/3 胎土:密 砂粒多い・赤色粒/金雲母を少量含む 焼成:良好 色調:橙色(7.5YR6/6 内外面) せいけい:外面=ナデ 底部木目痕 内面=一部ハケ目+指頭圧痕 年代:9世紀後半 備考:極めて硬質で器壁薄い
12	弥生土器 壺	表土一括	口径:(-) 底径:(-) 残高:2.1cm 重量:8.1g 残存:胴部小片 胎土:やや粗 砂粒/白色粒を含む 焼成:良好 色調:黄褐色(2.5YR5/4 内面) にぶい黄橙色(10YR6/4 外面) せいけい:外面=ハケ→複合鋸歯文 年代:弥生時代中期か 備考:相模Ⅳ-2～3様式



第 44 図 12 区出土遺物 (S=1/3)

第20表 12区出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	法量・観察
1	弥生土器 甕	調査区一括	口径:(-) 底径:(-) 残高:4.9cm 重量:30.4g 残存:胴部小片 胎土:やや粗 砂粒を多く含む 焼成:良好 色調:褐灰色(10YR4/1 内面) にぶい黄橙色(10YR7/4 外面) せいけい:外面=ハケ→一条の沈線 内面=ハケ 年代:弥生時代中期か 備考:相模Ⅳ-2～3様式
2	弥生土器 壺	調査区一括	口径:(-) 底径:(-) 残高:3.8cm 重量:16.7g 残存:肩部小片 胎土:やや粗 砂粒/白色粒を多く含む 焼成:良好 色調:にぶい黄色(2.5YR6/4 内面) 橙色(7.5YR6/6 外面) せいけい:外面=ハケ→櫛描による直線文→上下に複合鋸歯文 年代:弥生時代中期か 備考:相模Ⅳ-2～3様式
3	土製品 土鍋	調査区一括	口径:(-) 底径:(-) 残高:2.5cm 重量:7.1g 残存:口縁部小片 胎土:密 砂粒/金雲母を少量含む 焼成:良好 色調:橙色(7.5YR7/6 内外面) せいけい:外面=口縁部とツバ部ヨコナデ 内面=口縁部指ナデ 年代:中世 備考:伊勢系土鍋

ない。9世紀代の遺物であると推測される。9は口縁部がやや開く器形である。体部外面はヘラケズリと一部無調整で整えられており、9世紀後半の遺物であると推測される。10は箱型の器形を呈する坏であるが、遺存状態が極めて不良であり器面の調整は不明瞭であった。器形から9世紀前半の遺物であると推測される。11は土師器甕である。極めて硬質に焼成されており、器壁も薄手である。同様の甕は前田B遺跡でも確認されている。9世紀後半の遺物であると推測される。12は表土一括の弥生土器壺小片である。外面には複合鋸歯文が確認できる。弥生時代中期の遺物であると推測される。

このほか、動物遺存体が複数出土しており、いずれもウマの骨または歯であった。出土状況からは同一個体の可能性が極めて高いと指摘できる。ただし、部分的な骨のみが出土していることから、これらは他所からの流入である可能性が考えられる。

12区 (第44図、第20～22表)

1～3は調査区一括出土の遺物である。1・2は弥生土器であり、1は甕、2は壺の小片である。11区で出土した弥生土器と類似しており、沈線や鋸歯文が確認できる。弥生時代中期の遺物であると推測される。3は伊勢系土鍋である。小片のため南伊勢系か北伊勢系かの判別は困難であった。器壁は薄く、焼成良好である。中世の遺物である。

第21表 出土遺物一覧表

調査区	遺構名称	出土遺物
1区	調査区一括	土師器42片109.7g、須恵器 5片65.7g、灰釉陶器 1片1.4g、かわらけ 1片2.1g、礫 1点17.4g
2区	調査区一括	土師器 1片3.1g
3区	1号溝状遺構	土師器 3片10.0g
	調査区一括	土師器 7片11.8g
5区	1号溝状遺構	土師器 5片6.6g、灰釉陶器 1片1.9g、陶器(近世) 1片1.9g
6区	調査区一括	土師器 5片9.7g、磁器(近世) 1片9.2g
7区 8区	調査区一括	土師器13片45.6g
9区	1号竪穴状遺構	土師器586片2,503.6g、須恵器24片306.5g、灰釉陶器 1片1.5g、銅製品(古代:「神功開寶」) 1点1.6g、動物遺存体(古代～中世:馬歯) 1点1.5g、礫 5点117.1g
	調査区一括	土師器524片2,015.1g、須恵器26片150.3g、石製品(近代:硯) 1点29.0g、礫 3点61.7g
	表採一括	土師器21片131.9g、須恵器 1片5.2g
10区	調査区一括	土師器141片561.8g、須恵器 6片31.7g、土製品(近世:不明) 1点8.8g、動物遺存体(古代～中世:獣骨) 3点3.0g
	表採一括	磁器(近代) 1片4.1g
11区	調査区一括	弥生土器 3片21.7g、土師器399片2,708.7g、須恵器 9片196.8g、土製品(古代:不明) 1点9.6g、動物遺存体(古代～中世:獣骨・馬歯)16点78.7g、礫 3点243.6g
	表採一括	弥生土器 1片8.1g、土師器66片359.0g、須恵器 2片15.0g、鉄製品(近代:不明) 2点12.8g
12区	調査区一括	弥生土器 2片46.6g、土師器65片299.9g、須恵器 5片16.4g、土製品(中世:伊勢系土鍋) 1点7.2g、磁器(近世) 1片3.6g、礫 1点0.4g

第22表 出土遺物集計表

出土遺物	片数	重量(g)	出土遺物	片数	重量(g)
弥生土器	6	76.4	土製品(古代:不明)	1	9.6
土師器	1,878	8,776.5	土製品(中世:伊勢系土鍋)	1	7.2
須恵器	78	787.6	土製品(近世:不明)	1	8.8
灰釉陶器	3	4.8	銅製品(古代:銭貨「神功開寶」)	1	1.6
かわらけ	1	2.1	鉄製品(近代:不明)	2	12.8
陶器(近世)	1	1.9	石製品(近代:硯)	1	29.0
磁器(近世)	2	12.8	動物遺存体 (古代～中世:獣骨・馬歯)	20	83.2
磁器(近代)	1	4.1	礫	13	440.2

第4節 まとめ

近現代の開発に伴う削平・攪乱を受けている地点が多かったが、古代を中心とした遺構・遺物が複数確認された。公共下水道の布設に関連する遺跡調査は、その特性上調査区の幅が狭いこともあり、遺構の全容を把握することが難しい。しかし、延長距離が長いので遺構・遺物の分布状況を詳細に把握することができる。今回の調査では、特に三浦型甕として分類される類製塩土器の出土と弥生時代中期頃の土器片出土が極めて大きい意義を持つものであった。以下に周辺遺跡の状況と併せて記述する。

【三浦型甕】

器壁が厚く口縁部が垂直に立ち上がり、器面の調整が粗い特殊甕の出土は砂丘（湘南砂丘）上に立地する宿遺跡や池袋A遺跡でも確認されている。いずれの遺物も被熱による損傷が著しく、破片での出土であった。これらの遺跡では平安時代の貝塚（貝溜まり）が複数確認されており、早くから海産物加工との関連性が指摘されていたが、類例の少なさ故に議論が困難であった。本市以外の湘南地域を見ると、同様の甕は鎌倉市の由比ガ浜中世集団墓地遺跡からも出土しており、湘南に位置する砂丘地帯からわずかながら報告が上がっていた。

これらの甕が多く出土するのは三浦半島であり、中でも葉山町の三ヶ岡遺跡では砂丘上に構築された炉址跡遺構で多量に出土したことから、海産物加工・製塩とのつながりが極めて深い遺物であるとの認識がなされた。いずれも海浜地域の砂丘上に構築された遺跡から出土することが多く、同一の目的を持って使用されていたものと推測される。

茅ヶ崎市の場合には、石帯や墨書土器などの古代官人層と関わりが深い遺跡の周辺から出土している事例が多い。海産物加工と官人層との関わりは不明であるが、地域的な特色として今後の調査成果を蓄積することが必要である。また、横須賀市の日向遺跡では三浦型甕とともに中世の伊勢系土鍋が出土している。本調査地点との共通性が目立っており、注目される。

【弥生土器】

11区と12区では小片ながら沈線・鋸歯文のある弥生土器が出土した。いずれも極めて小さい破片のため時期の特定は困難であったが、文様や胎土の特徴から弥生時代中期頃の遺物であると推測される。特に鋸歯文の壺については綾瀬市神崎遺跡など東海地方との関わりが強い遺跡から出土する遺物と類似しており、市域南部でも早い時期から東海地方との交流があった可能性が指摘できる。

本年度調査では隣接した11区・12区のみ弥生土器が出土しているため、遺物の分布に偏りが窺われる。両調査区の北側に位置する平成16・17年度の調査地点からは弥生土器の出土はない。このことから、弥生時代の遺構は南側に隣接する網久保B遺跡に存在する可能性が指摘できる。今後、調査を実施する際には弥生時代の遺構が存在する可能性も考慮して実施することが望ましい。

引用・参考文献

- ・押木弘己 2022「鎌倉市内遺跡の出土品一報告書非掲載資料を中心に」『鎌倉市教育委員会文化財調査研究紀要』第4号
鎌倉市教育委員会
- ・上杉孝良 2019『新・追浜歴史年表』追浜地域運営協議会
- ・神奈川県教育委員会 2018『潮風と砂の考古学 図録』神奈川県教育委員会 平塚市博物館 神奈川県立歴史博物館